

# 小学校裁縫専科正教員臨時試験検定教科試験問題の分析

—1930年代における京都府を事例として—

遠 藤 健 治

中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第66巻 別刷

# 小学校裁縫専科正教員臨時試験検定教科試験問題の分析

—1930 年代における京都府を事例として—

遠藤 健治  
(美作大学)

## はじめに

本稿は、1930 年代における京都府を事例として、小学校裁縫専科正教員（以下、小裁専正）免許状の取得を目的とした臨時試験検定における教科試験問題を分析する。これにより、「学校単位でその卒業生に臨時試験検定の受検資格が付与された学校」<sup>1</sup>すなわち「小学校教員臨時試験検定認定校」（以下、認定校）卒業生に求められた小学校教員としての「教養」を解明することを目的としている。これは、認定校がいずれも私立各種学校であった<sup>2</sup>ことに照らし、その卒業生が無検定で小学校教員免許状を取得することができた「直接的」な小学校教員の養成機関である師範学校の一方で、臨時試験検定をとおして「間接的」に小学校教員を養成した私立学校にも目を向け、戦前日本における師範学校以外の小学校教員の輩出経路を探り、「出自（取得方法）と種別（免許種別）を異にする多様で雑多な者から構成され、そうした者たちの同居性という点にこそ特徴があった」<sup>3</sup>と言われる小学校教員界の実際を展望しようとする試みの一環である。

まず、戦前日本における小学校教員検定の概要について触れておこう。同制度は、いわゆる第三次小学校令期にほぼ確立した。それは無試験検定と試験検定に、さらに試験検定は定期試験検定と臨時試験検定に分けられた。そのうち、臨時試験検定は、戦前京都府においては、認定校卒業生および府市（教育会）講習修了者にかけり受検することができた。なお、本稿が対象とする小裁専正免許状の取得を目的とする臨時試験検定においては、教育大意すなわち教科、教授法、裁縫理論、裁縫実地からなる学科試験、さらに身体検査に合格することが求められた。

つぎに、本稿が京都府を事例とする理由について述べておこう。第 1 の理由は、同府が戦前の小学校教員検定に関する行政文書を豊富に所蔵しているからである。筆者は、本稿の執筆に際し、京都府立京都学・歴史館所蔵の小学校教員検定関係簿冊 108 冊を調査した<sup>4</sup>。これだけの行政文書が閲覧可能な都道府県は、全国的にも希少である。第 2 の理由は、京都府が小裁専正免許状を含む小学校専科正教員免許状の取得を目的とする試験検定において多数の合格者を輩出したからである。丸山剛史は、1900（明治 33）年から 1940（昭和 15）年にかけて実施された試験検定において、同府が全国第 6 位の小学校専科正教員合格者を輩出したことを明らかにしている<sup>5</sup>。

そして、小学校教員検定教科試験問題を分析する先行研究について言及しておこう。山本朗登<sup>6</sup>は、明治期兵庫県において実施された定期試験検定教科試験問題を分析することにより、小学校教員検定史において、教科試験問題研究の道を開いた。これに続き、筆者も、戦前京都府を事例として、尋常小学校本科正教員免許状の取得を目的とする臨時試験検定教科試験問題<sup>7</sup>、小裁専正免許状の取得を目的とする無試験検定（一部試験）教科試験問題<sup>8</sup>を分析した。そこでは、その対象が前者においてはそのすべてが、後者においては主に私立学校卒業生であったことに照らし、戦前日本における私立学校卒業生に求められた小学校教員としての「教養」を探ることを目的とした。そして、それにより、前者においては「教授論」への、後者においては「教授論」および「訓練論」への精通が求められたことを解明した。もっとも、小学校教員検定教科試験問題を分析する研究は、これ以外皆無と言えよう。ただし、戦前日本における小学校教員に求められた「教養」を探るためには、うえの研究成果に加え、本稿が対象とする臨時試験検定教科試験問題にも着目し、その分析を進める必要があるのではないかと。

本稿は、こうした問題意識のもと、とくに私立学校による臨時試験検定をとおした「間接的」な小学

校教員の養成という視点により、1930年代の京都府において実施された臨時試験検定教育科試験問題の分析をとおり、そのすべてが私立学校であった認定校の卒業生に求められた小学校教員としての「教養」を解明したい。

## 1. 小裁専正免許状の取得を目的とした臨時試験検定教育科の実施内容

うへの課題をみるにあたり、あらかじめ、小裁専正免許状の取得を目的とした臨時試験検定教育科の実施内容を概観していこう。

表1 小裁専正臨時試験検定教育科の実施概要

	1930年	1931年	1932年	1933年
実施月日	3月11日	3月11日	3月10日	3月7日
実施場所	各認定校	京都府師範学校	京都府師範学校	京都府師範学校
問題作成者	北村金三郎 (京都府師範学校教諭)	中村幸一 (桃山高等女学校教諭)	浅野律太郎 (京都府女子師範学校教諭)	中村幸一 (桃山高等女学校教諭)
試験時間	1時間	1時間	1時間	1時間
問題数	大問2問	大問2問	大問1問小問5問	大問2問
最高点	90点	85点	70点	70点
最低点	5点	10点	0点	5点
平均点	56.9点	53.4点	37.5点	44.6点
受検者数	153名	125名	103名	104名
合格者数	63名	52名	29名	36名
合格率	41.2%	41.6%	28.2%	34.6%
認定学校名	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科
	1934年	1935年	1936年	1937年
実施月日	3月7日	3月18日	3月17日	3月16日
実施場所	京都府師範学校	京都府師範学校	京都府師範学校	京都府師範学校
問題作成者	中村幸一 (桃山高等女学校教諭)	中村幸一 (京都府女子師範学校教諭) 田村泰次郎 (京都府女子師範学校教諭)	中村幸一 (京都府女子師範学校教諭)	中村幸一 (京都府女子師範学校教諭)
試験時間	1時間	1時間	1時間	1時間
問題数	大問2問	大問2問	大問2問	大問2問
最高点	95点	90点	90点	88点
最低点	0点	5点	0点	0点
平均点	47.4点	42.4点	35.6点	24.1点
受検者数	100名	71名	73名	92名
合格者数	5名	4名	2名	7名
合格率	5.0%	5.6%	2.7%	7.6%
認定学校名	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科	京都高等手芸女学校師範科 成安女子学院裁縫部師範科 京都裁縫女学校専攻科

[註] 「小学校教員免許状及成績優良証明書授与ノ件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許、復令書御真影及映画教育、勅語謄本』請求番号昭05-0043)、「京都国学院卒業生ニ対スル臨時試験検定ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭08-0056-004)、「小学校教員免許状授与ノ件」(『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭08-0056-005)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭09-0036)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『検定及免許』請求番号昭12-0090-002)、「昭和十年三月(裁専臨時)五月(臨時)施行試験検定一件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『検定及免許』請求番号昭12-0090-003)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『検定及免許』請求番号昭14-0083-001)より作成。

具体的には、中村幸一<sup>9)</sup>を中心として、桃山高等女学校、京都女子師範学校教諭がそれを務めた。

なお、試験時間は、例年1時間であった。また、問題数は、1932(昭和7)年を例外として、例年2問であった。

では、教育科の成績は、いかなるものであったのか。その最高点は70点から95点、最低点は0点から10点、平均点は20点台から50点台のうを推移した。学科試験においては、全科目に合格しなくとも、一部科目の成績が60点以上の者には、その科目に関する成績優良証明書が授与された。これに照らすならば、うへの教育科の成績が芳しくなかったことがわかる。

これに伴い、受検者、合格者ともに、年々減少した。合格率も、年々下降し、1934(昭和9)年以降は数%まで低下した。前述のように認定校は、そのすべてが私立学校であった。そのため、認定校卒業生を対象とする臨時試験検定は私立学校卒業生が小裁専正免許状を取得するためのルートとして期待されたものの、年を追うごとにその期待に応えることができなくなっていったことがわかる。

## 2. 臨時試験検定教育科の出題範囲および出題内容

小裁専正免許状の取得を目的とした臨時試験検定の実施が確認されるのは、1930年からである。以降、1937年に至る8年間の教育科の実施内容を整理したものが、表1である。これによれば、その実施月日が毎年3月中であったことがわかる。実施場所は、1930(昭和5)年は各認定校であったが、1931(昭和6)年から京都府師範学校に固定化された。問題作成者は、試験の都度、京都府小学校教員検定委員会が臨時委員として任命した。

では、こうした臨時試験検定教育科の出題範囲および出題内容は、いかなるものであったのか。

表2 小裁専正臨時試験検定教育科の出題範囲 および出題内容  
(単位：○=大問、●=小問)

出題範囲	出題内容							
	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年
教育の意義、効果								
小学校教育などの目的			●●					
養護論			○					
教授論	教授の目的			○				○
	教授の材料				○	○	○	
	形式的陶冶							
	教授の方法	○	○					
	教授の方法と児童の自発活動							
	学業成績の考査及び修業・卒業の認定							
	訓練の目的							
訓練論	訓練と感情教育					○		
	訓練と習慣							
	訓練と個性							
	訓練上より見たる家庭社会及び学校の位置	○						
	訓練の方法		○	○	○		○	○
	操行査定							
	教育者							
小学校以外の教育機関								
その他			●●●					
合計	大問2	大問2	大問1小問5	大問2	大問2	大問2	大問2	大問2

[註] 「小学校教員免許状及成績優良証明書授与ノ件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許、復令書御真影及映画教育、勅語謄本』請求番号昭05-0043)、「京都国学院卒業生ニ対スル臨時試験検定ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭08-0056-004)、「小学校教員免許状及成績優良証明書授与ノ件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭08-0056-005)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭09-0036)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『検定及免許』請求番号昭12-0090-002)、「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴史館所蔵、『検定及免許』請求番号昭14-0083-001)より作成。

状の取得を目的とする定期試験検定教育科の受験参考書である小川正行、佐藤熊次郎、篠原助市共著『普通教育学』(宝文館蔵版、1913年)<sup>11</sup>を参照した。これに伴い、「教授論」と「訓練論」の出題範囲の詳細は、同書の目次にならった。さて、これによれば、1932(昭和7)年を例外として、出題内容が「教授論」と「訓練論」に集中したこと、そして両者から毎年1問ずつ出題されたことがわかる。そこで、臨時試験検定教育科の出題内容を「教授論」と「訓練論」に分けて、以下、みていくことにしよう。

ところで、それにさき立ち、1932(昭和7)年において、出題傾向に変化が生じた理由について言及しよう。それは、1931(昭和6)年以降、同年にかぎり、問題作成者が浅野律太郎であったことによる。これに伴い、問題数、出題内容も、他年に比べて異なった。具体的には「養護の目的を述べよ」といった「養護論」から、また「次に就き知る所を記せ」として、「学齢児童」、「二部教授」の意味を問う「学校教育などの目的」、「感情移入」、「多血質」、「演繹推理」の意味を問う「その他」すなわち心理学分野から出題された<sup>12</sup>。

## (1)「教授論」の出題内容

さて、話題を「教授論」と「訓練論」の出題内容に戻すことにしよう。まず、「教授論」の出題内容についてである。再び表2に目を移すならば、同じ「教授論」であっても、それが主に「教授の方法」と「教授の材料」から出題されたことがわかる。具体的に「教授の方法」については、「教式の意義並に

(判読不明)

□ □ 如何(1930年)」<sup>13</sup>、「示範的教式適用上の注意を列記せよ(1931年)」<sup>14</sup>といった出題がなされた。

では、こうした出題に対し、いかなる解答が求められたのか。ここでは、1931(昭和6)年为例として、『普通教育学』より、その模範解答を探ってみよう。同書は、「直接、模範を示して之に倣はしむる場合」<sup>15</sup>に用いられる示範的教式の適用上の注意をつぎのように列記する<sup>16</sup>。

(1)示範は児童の発達程度に応じて、適宜之を分解して示すべしと雖も、余りに分解を過ぐることも亦不可なり。

(2)器械的の模倣よりは、理解的の模倣を尚ぶべし、従つて示範には説明を要すべし。されど冗漫を避くべく、又一時に多くを説明すべからず。

表2は、その出題範囲、ならびにそれにより、さきの8年間の出題内容を整理したものである。なお、臨時試験検定においては、定期試験検定と異なり、その受験参考書が定められていなかった。しかし、臨時試験検定が臨時的に実施された定期試験検定であった<sup>10</sup>ことに照らし、その出題範囲を明らかにするため、小裁専正免許



(3)教材によりては、示範の後に斉唱・斉読を必要とするものあるべし。斉唱・斉読は、すべての児童を同時に活動せしめて、その倦怠を防ぎ、怯者には勇気を与ふる等の利あり。されど屡器械的の模倣に陥らしむることあり、警めざるべからず。

(4)示範の後には練習を努むべし。

うえの出題においては、こうした記述に沿った解答が求められたのであろう。言い換えるならば、その出題程度は同書の理解をもって、解答可能なものであったと考えられる。

一方、「教授の材料」については、具体的に「教授細目の意義及之が編制に関する重要な原則をあげよ（1934年）」<sup>17</sup>、「教材相互ノ連絡統合ニ就キテ記セ（1936年）」<sup>18</sup>といった出題がなされた。これをふまえ、ここでは、1934（昭和8）年を例として、やはり『普通教育学』より、その模範解答を探ってみよう。同書は、「小学校に於ける教科課程・教科用書等は法令に依り、概ね画一に制定」<sup>19</sup>されているものの、「実際の教授に方りては、土地の情況・児童の発達・学級の編制等諸種の事情を顧慮せざる可らざる」<sup>20</sup>ため、教授細目が必要であると説く。そして、その編制の原則をつぎのように列記する<sup>21</sup>。

(1)先づ各教科目の教材を各単元に就て研究し、其の土地の状況・学級の状態・児童の事情等に応ずるやう考案を回らし、次に之が教授に要する時間を調査し、而して後之を一学年間の週数又は小期数に配当排列すべし。

(2)各教材の排列は、季節の変化に一致せしむべし。

(3)一教科内に於ける縦の連絡と、他の教科との横の連絡統一とに注意すべし。

(4)児童の発達に応じて、偶発事項を応用し、又は反復練習をなすべき時間の余裕を設くべし。

(5)粗密孰れの極端にも流るゝことなく、繁簡宜しきに適ふべし。

(6)時々修正を施し、時勢の進歩と学校の事情とに適合せしむべし。

やはり、うえの出題においても、こうした記述に沿った解答が求められたのであろう。また、その程度も同書の理解をもって、解答可能なものであったと考えられる。

なお、「教授論」においては、1933（昭和8）年および1937（昭和12）年に「教授の目的」からも出題された。それは、同一の問題であり、具体的には「教授の形式的方面及び実質的方面につきて述べよ（1933年）」<sup>22</sup>というものであった。

## (2)「訓練論」の出題内容

つぎに、「訓練論」の出題内容についてである。再び表2に目を移すならば、「訓練論」においては、主に「訓練の方法」から出題されたことがわかる。そして、いずれの年度においても、「作業」に関して問われ、具体的には「訓練上、作業の大切な所以並に之に関する注意を記せ（1933年）」<sup>23</sup>、「訓練上作業ノ価値ヲ述ベヨ（1936年）」<sup>24</sup>といった出題がなされた。『普通教育学』は、「作業」について、つぎのように言及している<sup>25</sup>。

作業とは校舎内外の洒掃を始め、学校園の手入、動物の飼育等、特に訓練の目的を以て設けらるゝ身体的労作の謂なり。是等の作業は身体の労作に慣れしめて意思の実行力を増進する上に、其の効果決して小ならざるものなり。されば児童の発達程度に適する勤労の種類を選定し、教師率先労作に服して、模範によりて児童を督励することを努めざる可らず。

これによれば、同書が「作業」の種類と定義、効果、その実施上の注意について言及していることがわかる。うえの出題においても、同書の記述をふまえた解答が求められたのであろう。また、その程度も同書の記述を越えることなく、その理解をもってすれば、正答を導き出すことが可能であったと考えられる。

なお、「訓練論」においては、「訓練上より見たる家庭社会及び学校の位置」、「訓練と習慣」からも出題された。具体的に前者については「訓育の機会について述べよ（1930年）」<sup>26</sup>、後者については「訓練上強制主義ト自由主義トノ意義、長短並ニ其適用ニ就キテ記セ（1935年）」<sup>27</sup>といった出題がなされた。

## おわりに

以上、本稿は、1930年代における京都府を事例として、小裁専正免許状の取得を目的とする臨時試験検定教科試験問題を分析し、そのすべてが私立学校であった認定校の卒業生に求められた小学校教員としての「教養」を検討してきた。それは、戦前日本における師範学校以外の多様な小学校教員の輩出経路を探り、「多様で雑多な者から構成され、そうした者たちの同居性」に特徴があったと言われる小学校教員界がいかなる「教養」を具えた者により構成されたのかを展望しようとする試みの一環であった。

もっとも、本稿には、残された課題もある。たとえば教科の成績が低迷したのは、なぜか。今後は認定校入学者の修学歴や、認定校における教育学に関するカリキュラムなども視野に入れた検討により、その解明をめざしたい。

ただし、そうした課題を承知しつつも、本稿が明らかにした点を整理しておこう。それを一言で言うならば、臨時試験検定教科をとおして認定校卒業生に求められた小学校教員としての「教養」とは、「教授論」および「訓練論」への精通であったということである。なかでも、「教授論」においては主に「教授の方法」と「教授の材料」から、一方「訓練論」においては主に「訓練の方法」から出題された。このようにいずれにおいても、出題内容がほぼ固定化されたのは、問題作成者がほぼ固定化されたことによるのではないか。それを裏づけるかのように、1932（昭和7）年において、問題作成者が一時的に変化した際には、出題傾向も変化している。

以上をふまえ、今後の課題についても述べておこう。本稿は、小裁専正免許状の取得を目的とした臨時試験検定教科試験問題を分析した。一方、筆者は、前述したように尋常小学校本科正教員免許状の取得を目的とした臨時試験検定、小裁専正免許状の取得を目的とした無試験検定（一部試験）教科試験問題を分析した。そして、その対象が前者においてはそのすべてが、後者においては主に私立学校の卒業生であったこともすでに述べた。これをふまえ、今後は各検定の分析結果を、免許種別、受検者の修学歴および在学中のカリキュラムなども含めて比較、検討することにより、教科試験問題における異同を明らかにし、私立学校卒業生に求められた小学校教員としての「教養」を探り、戦前日本における小学校教員界がいかなる「教養」を具えた者たちにより構成されたのかをさらに解明したい。

## 註

<sup>1</sup> 井上恵美子『『小学校教員無試験検定認定校』の全国的動向』（日本教育学会第76回大会ラウンドテーブルP配付資料）、2017年、3頁。

<sup>2</sup> 戦前京都府における認定校の設置数および学校種については、拙稿「戦前京都府における『小学校教員臨時試験検定認定校』の存在と意義」（『日本教育史学会紀要』9、2019年）を参照されたい。

<sup>3</sup> 笠間賢二「小学校教員無試験検定研究の課題」（『宮城教育大学紀要』51、2017年）154頁。

<sup>4</sup> 調査の詳細については、拙稿「戦前京都府において、私立学校卒業生は、小学校教員無試験検定合格者中にどれほどの位置を占めたのか——一九三〇年代以降を中心として——」（『地方教育史研究』40、2019年）を参照されたい。

<sup>5</sup> 丸山剛史「戦前日本の小学校教員検定合格者数の道府県比較（二）——無試験検定・一九〇〇——一九四〇年」（『宇都宮大学教育学部研究紀要（第一部）』62、2012年）48頁。

<sup>6</sup> 山本朗登による論稿とは、「明治期兵庫県における小学校教員検定『教科』試験に関する一考察——標準図書からみる出題分野——」（『山口芸術短期大学研究紀要』49、2017年）、「明治三〇年代兵庫県における小学校教員検定試験『教科』の分析」（『山口芸術短期大学研究紀要』51、2019年）をさす。

<sup>7</sup> 尋常小学校本科正教員免許状の取得を目的とした臨時試験検定教科試験問題の分析結果については、拙稿「尋常小学校本科正教員臨時試験検定教科試験問題の分析——1920年代末期から1930年代初期における京都府を事例として——」（中国四国教育学会編『教育学研究紀要』65、2019年）を参照されたい。

<sup>8</sup> 小裁専正免許状の取得を目的とした無試験検定（一部試験）教科試験問題の分析結果については、拙稿「小学校裁縫専科正教員無試験検定（一部試験）教科試験問題の分析——1920年代末期から1930年代初期における京都府を事例として——」（関西教育学会第72回大会配布資料）、2020年を参照されたい。

<sup>9</sup> 中村幸一の経歴については、精華百十年史編纂委員会編『精華百十年史』（京都精華女子中学校高等

学校、2015 年)を参照されたい。

<sup>10</sup> 拙稿「戦前京都府における臨時試験検定の実施過程と『実地授業』の位置づけ——尋常小学校本科正教員免許状の場合——」(『関西教育学会年報』44、2020 年)47 頁。

<sup>11</sup> 同受験参考書は、1926(大正 15)年京都府告示第 680 号「小学校教員及幼稚園保母検定志願者受験用参考書改正」によった(『京都府公報』第 1467 号、大正 15 年 12 月 24 日刊)。

<sup>12</sup> 「小学校教員免許状及成績佳良証明書授与ノ件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭 08-0056-005)。

<sup>13</sup> 「小学校教員免許状及成績佳良証明書授与ノ件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許、復令書御真影及映画教育、勅語謄本』請求番号昭 05-0043)。

<sup>14</sup> 「京都国学院卒業者ニ対スル臨時試験検定ニ関スル件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭 08-0056-004)。

<sup>15</sup> 小川正行、佐藤熊次郎、篠原助市『普通教育学』宝文館蔵版、1913 年、119 頁。

<sup>16</sup> 同前、120-121 頁。

<sup>17</sup> 「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『検定及免許』請求番号昭 12-0090-002)。

<sup>18</sup> 「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『検定及免許』請求番号昭 14-0083-001)。

<sup>19</sup> 小川正行、佐藤熊次郎、篠原助市『普通教育学』、前掲註 15、91 頁。

<sup>20</sup> 同前、91-92 頁。

<sup>21</sup> 同前、92-93 頁。

<sup>22</sup> 「小学校教員免許状授与ニ関スル件」(京都府立京都学・歴彩館所蔵、『小学校教員、幼稚園保母検定及免許』請求番号昭 09-0036)。

<sup>23</sup> 同前。

<sup>24</sup> 「小学校教員免許状授与ニ関スル件」、前掲註 18、「(『検定及免許』請求番号昭 14-0083-001)。

<sup>25</sup> 小川正行、佐藤熊次郎、篠原助市『普通教育学』、前掲註 15、164 頁。

<sup>26</sup> 「小学校教員免許状及成績佳良証明書授与ノ件」、前掲註 13、(『小学校教員、幼稚園保母検定及免許、復令書御真影及映画教育、勅語謄本』)。

<sup>27</sup> 「小学校教員免許状授与ニ関スル件」、前掲註 17、(『検定及免許』請求番号昭 12-0090-002)。

(謝辞)

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02412 の助成を受けたものである。